

オゾン療法により QOL の改善が見られた犬の心基底部腫瘍の 1 例

○大池三千男¹⁾ 古林与志安²⁾

1) おおいけ動物病院 2) 帯広畜産大学

【はじめに】犬の心基底部腫瘍は、比較的ゆっくりと進行する腫瘍である。根治は難しく、外科手術、化学療法や放射線治療が適応されている。オゾン療法は、弱い酸化刺激を与える事によって、生体反応を刺激する治療法である。今回、進行した犬の心基底部腫瘍に対して、オゾン療法を実施し、臨床症状の改善が認められたので報告する。

【症例】シーザー犬、雄、体重 6.7kg。10 歳時に、膀胱結石による尿閉解除の手術と去勢手術を実施した。

【治療および経過】10 歳、左前胸に Levine2/6 の心雑音を認め、胸部 X 線検査により心拡大を認めた。LR 像で大動脈基部の陰影が増加し、DV 像では気管の変位が認められた。ACE 阻害薬、ジギタリス、スピノロラクトン、ヒドララジン塩酸塩、硝酸イソソルビド、タウリン投与による僧帽弁閉鎖不全症の治療を開始したが、咳の頻度は少しずつ増加した。

11 歳、心拡大、大動脈基部の陰影増加と DV 像で気管の変位は進行し、興奮時の咳～嘔吐の頻度も増加した。

12 歳、大動脈基部の陰影はさらに増大し、気管を内側から外側へ圧迫する腫瘍性疾患が疑われた。

13 歳、大動脈基部陰影の増大と気管圧排像もより高度となり、心基底部腫瘍が強く疑われた。また、咳症状も悪化した。

14 歳、来院時心エコー検査では、腫瘍が左心房を上部より高度に圧迫していた。咳は悪化し心拍数は 200 回/分を超えていた。来院時治療として、痛みを伴わず、短時間の施術で済むオゾン注腸療法による治療を適用した。その結果、咳の頻度は減少し、嘔吐消失、食欲増進、体重も増加し、QOL が改善した。

15 歳、肺水腫に対してピモベンダンを追加した。肺水腫は改善したが、約 3 週間後に死亡した。病理解剖検査では、心基底部の大動脈周囲に腫瘍性病変が認められ、病理組織検査により、大動脈小体腫瘍と診断された。

【考察】本症例の大動脈小体腫瘍は、10 歳頃から発生したと考えられた。14 歳から実施したオゾン療法は、副作用も無く、臨床症状を軽減し、QOL を改善した。本症例は、オゾン療法開始から 253 日（約 8 ヶ月）生存し、15 歳で死亡した。オゾン療法は、本症例において、補完代替療法として有用であった。